

は し が き

Mansfield Park 注釈の仕事は、本巻をもってようやく一段落することになった。この第Ⅲ巻も既刊の第Ⅰ、Ⅱ巻同様、テキストにおける implicit なものを能う限り explicit なものにするという principle に基づいて進めてきたのであるが、第Ⅲ巻の性格上、先行の二巻のテキスト及び注への言及が多くなり、すでに自明と思える語句でも、あらためて OED 等にその典拠を求め確認するというわれわれの基本姿勢を貫いたためもあって、予想外に注の部分が増大するという結果になった。これにはまた、巻を追ってゆくにつれ、われわれ自身の Austen の英語に対する思い入れがより深くなってきたという事情も加わっているかも知れない。読者諸賢の御海容を願うところである。

また、本巻の刊行は、当初の予定より一年以上も遅れたのであるが、このことについてもそのよろしき御諒解を乞いたい。これには、本巻を担当する一員である大西が十分にその責めを果たしえなかったことによるところが大きい。それだけ負担過重となった坂本・奥村両氏の寛恕をも請いたい。ともあれ、*Mansfield Park* 全三巻の注釈が出揃ったいま、ようやくわれわれの仕事が全体として、世の読者の前に呈示され、批評される機会を迎え得ることを幸いに思う。

本巻の作成上の手順は前二巻同様のものである。但し、本巻を特徴づけるものは、共同作成者としてあらたに英国人の同僚 Stephen Gibbs 氏の参加を得たことである。Austen の言葉に対する鋭い感受性と創見をもって、氏は様々に寄与してくれたが、作業の過程で

の、氏との限りない議論がわれわれに与えた刺激には測り知れないものがある。時には果てしのつかない議論に結着をつけるべく周到な監修の任に当たっていただいた吉田氏と、終始その整理と再整理の繰り返しの労をいとわなかった坂本氏に深く感謝する。

本巻を特徴づけるいま一つのものは、巻末の「索引」であり、この労の多い作業を引きうけていただいた、旧同僚であり第Ⅰ巻担当者の一人であった、広島大学助教授 田中逸郎 氏に感謝申し上げたい。これなくしては、われわれの作業はついに画龍点睛を欠くものとなったであろう。また、本巻には二篇の語学関係の巻頭論文を収録してあるが、その一つは同氏の執筆になるものであり、いま一つの論文は長谷川存古氏によるものであるが、これら二篇の執筆者及び、それらの論文転載を許可していただいた、広島大学文学部紀要編集部、関西大学『英文学論集』編集部にも紙面を借りて御礼申し上げます。また本巻に付した挿絵・地図の選択及び解説は、前二巻同様、坂本氏に一任した。なお **Portsmouth** の地図作成に当たっては、翻訳『マンスフィールド・パーク』の訳者である白田昭氏に格別の配慮をいただいた。厚く感謝申し上げます。

最後になったが、本巻の刊行に当たって、われわれの作業の遅滞にもかかわらず、これに対して良き理解を示すと同時に出版費用の助成を認めていただいた関西大学出版委員会の方々、並びにわれわれの作業を辛抱強く支え、あらゆる援助を惜しまれなかった出版部の若林茂信、井内雄二、赤木一夫の諸氏に厚く感謝申し上げます。

1984年7月

大 西 昭 男

CONTENTS

	PAGE
はしがき	iii
LIST OF ILLUSTRATIONS & ACKNOWLEDGEMENTS	vi
TEXT について	vii
INTRODUCTION	
I. JANE AUSTEN の進行形 (長谷川存古)	viii
II. JANE AUSTEN の体験叙法 (田中逸郎)	xxvi
MANSFIELD PARK VOL. III	1
NOTES	221
NOTES ON THE ILLUSTRATIONS	560
INDEX TO NOTES ON VOLS. I—III	563
SUPPLEMENT	642

LIST OF ILLUSTRATIONS

- The Saluting Platform **Plate 1**
- A Circulating Library **Plate 2**
- The Sally Port **Plate 3**
- The Garrison Chapel **Plate 4**
- A Map of Portsmouth **Plate 5**

ACKNOWLEDGEMENTS

The producers of this volume would like to thank the following publishers and libraries for their courteous contributions toward the reproduction of the four illustrations and a map listed above: Hampshire County Museum Service, Winchester and Oxford University Press, London, for Plate 1; BBC Hulton Picture Library, London and the Hamlyn Publishing Group Ltd., London, New York, Sydney, & Toronto, for Plate 2; Portsmouth City Libraries, Portsmouth and the Macmillan Press Ltd., London, for Plates 3 and 4; the British Library and Kent University Library, for Plate 5. For the sources of the illustrations, see the 'Notes on the Illustrations.'

TEXT について

現在容易に入手できる *Mansfield Park* のテキストは数種に及ぶが、本書のテキストは、R. W. Chapman 校訂の *The Oxford Illustrated Jane Austen* (1978), John Lucas 校訂の *The Oxford English Novels* (1970), Tony Tanner 校訂の Penguin 版 (1966), R. B. Johnson 校訂の *Everyman's Library* 版 (1955) の *Mansfield Park* を比較検討して、まとめたものである。これらのテキストに時としてみられる句読法などの問題は、読者の便宜を考慮し、適宜変更を加えた。語句そのものに関する問題点は、その都度 NOTES に記しておいた。

INTRODUCTION

I. Jane Austen の進行形*

—*Mansfield Park* を中心に—

0. はじめに

Jane Austen の作品の英語を読んでゆくうちに、Syntax の面で最も深い印象を受けるのは、その特異な進行形¹⁾の使い方であろう。Phillipps (1970) も次のようにいっている。

“The most interesting and idiosyncratic feature of tenses in the novels . . . is the use of expanded tenses.”

(Phillipps 1970 : p. 111)²⁾

本論は、特に *Mansfield Park* を読み進みながら、その中に現われる進行形の意味と機能に対する一つのアプローチを試み、一定の結論を示そうとするものである。

Jane Austen の作品と手紙の中での進行形については、すでに

*本稿は、長谷川 (1980) にいくらかの増補と改訂を加えたものである。なお、本稿での *Mansfield Park* からの引用は、特に断わらない限り関大版テキストによる。

1) この形式には周知のとおり様々な名称があるが、ここではもっとも普通の名前を使うことにする。Sweet (1891) 以後の各文法家の使った様々な名称とその理由については、たとえば Scheffer (1975 : pp. 1-2) を見よ。

2) Phillipps (1970) は、Jespersen (1924, etc.), Karl Brunner, Raybould (1957) の例に従って、‘Expanded tense’ という用語を使っている。

Raybould (1957) があり、Phillipps (1970) も、進行形についてはこの論文を踏まえている。ここではまず、Raybould (1957) を視野に置きつつ、筆者のとったアプローチを概括しておきたい。

本論は、*Mansfield Park* だけについても、決して進行形の全用例の exhaustive な検討にもとづいたものではない。後に §1 で示すように Raybould (1957) が他のいくつかの作品について行なったような、進行形の集計と分類も行なっていない。しかし、このことが *Mansfield Park* での進行形の意味と機能を考察する際に、決定的な障害になるとは考えられない。Raybould (1957) の場合にも、実際に意味を検討したのは、彼女が ‘expanded infinitive’ と呼ぶ、“I wanted to be doing something,” のような形だけである。その場合にも、彼女の結論はかならずしもすべての例を説明し尽し得るものでは決してない一つの idea に過ぎないことは、Phillipps (1970) も認めているとおりでである。

しかし Raybould (1957) は少なくとも、Jane Austen の英語の中に進行形の現われる頻度が、執筆の年代が進むにつれてどう変化するかという、通時的な比較を行なっている。筆者は、進行形という一つの側面からも、*Mansfield Park* を彼女の他の作品の中に、ましてその手紙の中に、位置づけるという作業を行なっていない。

また、Jane Austen の英語を英語史の中に位置づけ、その中に現われる進行形の、英語史の中での意義を追求するという仕事も、ほとんど本論の枠外である。

そのかわりに筆者が試み得たのは、現代英語での進行形についての一定の見方を踏まえて、そこから Jane Austen を振り返って見たとき、どんなことが言えるかを検討することであった。

もちろん、このような方法に頼ることにはかなりの危険が伴い、恣意的な「読み込み」を text に押しつける結果になり兼ねない。しかし、筆者はこのような欠陥を、「text への沈潜」によって

補うことにつとめた。作品に現われた個々の進行形を、なるべく大きな context の中に置いて眺めてゆくとき、現代英語の進行形についての一つの見方が 19世紀初頭の作品の英語にも適用可能であり、さらに、その見方にもとづきながら text の中からそれ以上のものを汲み取ることができるならば、それは作品の英語の一つの読み方として成立し得るのではないか。

1. Raybould (1957) の所説

これまでに、Jane Austen の進行形を論じたおそらく唯一の論文は Raybould (1957) である。したがって、まずこの論文を概観してから、本論に進むことにしたい。

前節でも触れたように、Raybould (1957) は、まず Jane Austen の作品と手紙の中に現われる進行形の頻度の集計を行なっている。実際にとりあげられているのは、前期の作品では *Sense and Sensibility* と *Pride and Prejudice*、後期のものでは *Persuasion* であり、¹⁾ さらに書簡集の中から前期と後期のそれぞれ 100 ページ分が調査されている。その結果明らかになったこととして、次のような点が挙げられている。

(i) 進行形の現われる頻度は、年代が進むにつれて増しており、とくに ‘Non-finite form’²⁾ で著しい。

(ii) ‘Finite form’ の進行形について見ると、現在進行形の頻度は前・後期ともに変わらないのに、過去進行形は年代が進むにつれて増加する。

1) *Sense and Sensibility* は 1798 年ごろ書き始められ、1811 年の出版に先立って修正が加えられた。*Pride and Prejudice* は 1797 年に出版が企てられたが成功せず、1813 年に出版された。また *Persuasion* は 1815-16 年の作で、作者の死後 1818 年に出版された。

2) to 不定詞の中や助動詞のあとの “be making” のような形。

(iii) といっても、過去進行形の増加は作品に限られ、手紙では過去進行形は絶対数も少なく、年代による増加もない。逆に手紙では単純形が盛んに使われている。

次に Raybould (1957) は進行形の Function として ‘Modal Use’ と、‘Iteration’ を表わす Function とを挙げている。もっとも、進行形の Function がこの二つに尽きるとは彼女はっていない。彼女自身のことばを借りると、

“Only two points likely to be of interest have been chosen to illustrate the nature of the inquiry.” (Raybould 1957: p. 179)

である。

この二つの Function のうちの ‘Modal Use’こそ、Raybould (1957) のもっともユニークな見解である。これは、Jane Austen の英語では進行形は Subjunctive Mood を表わす働きをしているという説である。たとえば、

(1) I wish him *to come*,

とは対照的に

(2) I wish him *to be coming*,

は

(3) I wish he *would come*,

と同じ機能を持っているという見方である。もっとも Raybould (1957) は、ほとんどもっぱら ‘Non-finite’ の進行形にしぼって立論しているのだが。そして ‘Non-finite’ に関する限り彼女の議論は説得的である。しかし、Finite Form の進行形が問題になると、その説得力はそれほどのものでないことは、彼女自身も認めている様子がうかがえる。本論では、Raybould (1957) の所説は前提にしながらかも、一応それとは別のところから出発して、Jane Austen の ‘Finite Progressive’ へのアプローチを試みたい。

2. 『静態—動態』表現』としての進行形

本論では、現代英語での進行形は『静態—動態』表現』であるという見方を出発点として、そこから Jane Austen の英語を振り返ってみたい。¹⁾ この見方によれば進行形はまず何よりも動作を一時点において「静態」としてとらえる「静態表現』であるが、進行形の意味はただそれだけにとどまらず、一時点における静態としてとらえることによって、逆にその動作そのものの躍動する姿 (= 「動態』) を表現する形なのである。

たとえば、

(4) When we arrived she *was making* some fresh coffee,
[Leech]

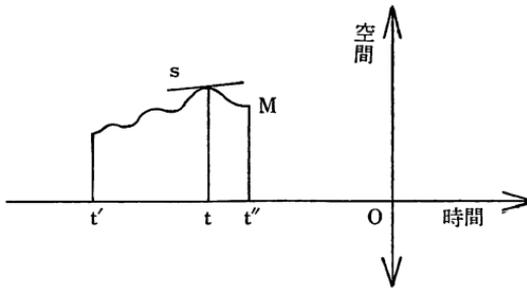
は、「コーヒーをいれる」動作を、“when we arrived” で示されている一時点において、静止的にとらえていると考える。この意味で、進行形は「静態表現』である。²⁾

しかし、進行形の意味の *essence* は、じつは次の点にある。すなわち、進行形は、躍動する動作の「動態』を、ある一時点において静止的に「静態』としてとらえることによって、逆にその動作の「動態』そのものを表現する形式であるということである。(4)の例でいえば、「コーヒーをいれる」動作を過去の一時点において静態としてとらえることによって、逆にその動作を生き生きと描き出すのである。

1) 『静態—動態』表現』という名称は別として、この見方の内容はすでに長谷川 (1973) で詳論したものである。

2) この点で、毛利 (1972) の §5 「日英語の比較と意味——動作表現 対 静止表現』は示唆が深い。

(5)



これを図示すれば(5)のようになる。

横軸を時間、縦軸を空間とし、時間は左から右へ進むとする。原点Oは、発話の時の話者の時間的・空間的な位置である。Mはある運動であり、これは t' の時点で始まり、 t'' の時点で終る。進行形の表現がとる「視点」((4)であれば“when we arrived”で示されている)を t とすれば、この進行形は運動Mを t の時点で静態的にとらえる直線 s を表わしていると考えられる。そして s を表わすことによって、Mの躍動する姿を表現するのが進行形であるといえる。

これはたとえばテレビや映画で使われる、画像を決定的瞬間で一時的に停止させることによって、逆にそのシーンの躍動感を示す手法に類比することができる。

ここで強調しておきたいのは、進行形が『静態—動態』表現であるという場合、進行形と単純形とを区別するものは「動作のあり方」そのものではなくて、話者の側の主観的な「動作のとらえ方」の相異であるということである。¹⁾

1) このような、進行形を含めた時制一般の主観性は細江(1932, 1973²⁾)によって唱えられたが、この場合時間そのものが時制から追放され、時制は Mood 的なものとされたところに問題がある。↗

3. Jane Austen の英語における進行形の意味

Phillipps (1970) は Jane Austen の英語を扱ったもっとも体系的な研究であるが、その中の進行形を論じた部分には、§2で述べたものと酷似した見方が示されている。

(6) As Miss Raybould points out, many instances are far removed from present-day usage; especially those in which the durative aspect of the verb, now normally conveyed by the expanded tense, is severely limited, implicitly or explicitly, by some circumscribing of the time in the context. In the first instance here, for example, the use of the expanded tense to describe Jane Fairfax falling overboard from a ship would only be likely today if we were re-showing the whole incident in slow-motion photography!

(7)¹⁾ A water-party; and by some accident she *was falling* overboard. He caught her. (*Emma* 218)

(8)¹⁾ Sir Thomas... had sought no confidant but the butler, and *had been following* him almost instantaneously into the drawing-room. (*MP* 180)²⁾ (関大版 vol. II, p. 7)

(Phillipps, 1970: pp. 111-12)

✓(Raybould (1957) がこの点で細江 (1932, 1973²⁾) と幾分重なったのは興味深い。) この考え方に対する批判については毛利(1972): pp. 159-66 参照。

1) 引用文内の例文の番号(7)、(8)は長谷川による。

2) *MP* は *Mansfield Park* の略、次の数字は Chapman 版でのページを示す。

すなわち、Phillipps (1970) は現代英語での進行形の主な意味¹⁾は Duration だと考えるのだが、Jane Austen の場合には、進行形によって示される動作の継続期間 ((5) でいえば t' から t'' までの時間)が、現代英語の場合にくらべて非常に短い場合が多いのが特色だというのである。たとえば(7)の場合、'fall' はアツという間のできごとだから、現代英語ではふつう進行形にはなれない動詞なのに、Jane Austen では進行形になっている。²⁾そして、このような進行形を Phillipps (1970) は英語史の中で次のように位置づけている。“What is particularly interesting is that in this wider use of expanded tenses, Jane Austen is clearly an innovator;” (Phillipps 1970: p. 112)

Jane Austen の英語の中のこの現象を、§2 で述べた『「静態—動態」表現』という考え方に立って観察すればどうであろうか。非常にうまく説明できると思われる。(7)の場合であれば、転落の時間がいかに短くても、その短時間のあいだの、文字どおりある時点に視点を定めて、転落を「静態」としてとらえ、そのことによって逆に転落そのものを迫真的に描き出しているのである。‘slow-motion photography’ という Phillipps (1970) の比喩は、『「静態—動態」表現』の考え方と結果的には同じである。「動作そのもののあり方」

1) 「進行形の意味」といった概念は Phillipps のものではなく、筆者の立場から言いなおしたものである。

2) 次の文を参照。

“Suddenly he falls” could become

“Suddenly he is falling”

if we want to concentrate on the process of his falling, a sense of slow motion horror. This, however, is not very likely, since falling (unless it's falling a long way) is not usually seen as a process.

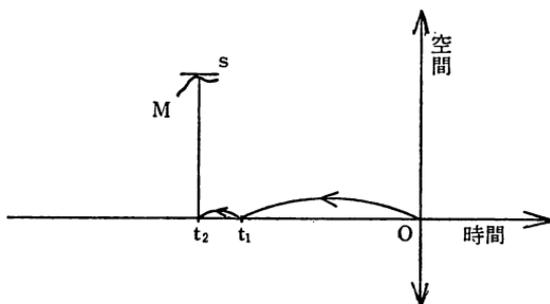
(Keene and Matsunami 1969: p. 44)

ではなく、「話者による動作の主観的なとらえ方」として進行形を見ない限り、(7)のような文は説明できない。そして、進行形による表現が ‘slow-motion photography’ であるというときには、その単純形との相異はすでに「動作そのもの」ではなくて「カメラ」の相異に帰せられているのである。

(8)の場合の過去完了進行形 ‘had been following’ の意味をとらえるためには、まず物語全体が過去のこととして過去形で語られていること、そしてここでは特に作中人物の一人 (Mrs. Norris) の立場から語られていることを押えておかなければならない。すると(8)の場合は、過去における Mrs. Norris の立場に立って、さらにもう一段過去 (Before-past) の、(おそらく1時間ほど前か、) Sir Thomas が butler につづいて drawing-room に入って来るその瞬間に視点をセットし、その視点から Sir Thomas の動作を「静態」として把握することによって、逆にその動作そのものを「動態」として表現しているのである。

これを図示すれば(9)のようになる。

(9)



t_1 は過去の時点であり、(9) であれば語り手は t_1 に視点を置いて Mrs. Norris の立場からさらに過去の時点 t_2 を眺めている

といえる。M は進行形動詞の指示する動作（(8)の場合であれば‘following’）である。

そして、この進行形による『静態—動態』表現』には、その動作‘following’に対して、語り手が今その視点に立っている人物（(8)の場合は t_1 の時点での Mrs, Norris）が抱いている様々な感情（(8)の場合は、自分に何の出場も与えずにイキナリ入って来たことに対する当惑など）を implicit に盛り込むことができるのである。

このように、進行形の意味を直接に Duration としたのでは説明のできない、Jane Austen 特有の進行形の用法も、元来は現代英語での進行形の検討から得られた『静態—動態』表現』の立場から適切に説明し得る。そして、この立場から逆に Duration の現象へと説明を広げてゆくことができるのである。

4. Jane Ansten の進行形の語用論的機能

§3 ですでに、(8)の過去完了進行形が、語り手がここで Mrs. Norris の立場に立っていることと 関連があることを述べたが、§4 ではこの点をさらに追求して、Jane Austen の進行形が、その作品の語り手の、ある作中人物に対する Empathy を表わす機能を果していることを示したい。¹⁾

まず(10)を見てみよう。

(10) ... Without studying the business, however, or knowing what he was about, *Edmund was beginning* at the end of a week of such intercourse, *to be a good deal in love*; and to the credit of the lady it may be added, that without his being a man of the world or an elder brother, without any of the

1) Empathy については毛利 (1980) : §16 「話者の視点」を参照。

arts of flattery or the gaieties of small talk, *he began to be agreeable to her*. She felt it to be so, though she had not foreseen and could hardly understand it; ...

(*MP*, vol. I, p. 81)¹⁾

“*Edmund was beginning ... to be a good deal in love*” という進行形に対して、“*he began to be agreeable to her*(= the lady = Mary Crawford)” という単純形の contrast が目をひく。もちろん統語的には、前者には “at the end of a week of such intercourse” という、視点を特定する句がついているのに対して、後者の単純形にはそれがないということがいえる。しかしそれだけでは、なぜ前の Edmund の心境を述べる文には視点を示す句がついているのに、あとの Mary の心境を述べる文にはそれがないのかは説明できない。

(10) の、単純形と進行形の contrast は、作品の語り手がこの部分で Edmund に Empathy を置いて語っており、‘;’ 以後の部分は、“it may be added” の文字通りに、きわめて detached な「注記」に過ぎないということによって説明ができると思われる。(これは Mary を指して ‘the lady’ と呼んでいることにも現われている)。“*Edmund was beginning ...*” は、Edmund への Empathy の表現であり、これは、進行形が視点を固定し、したがって対象に対する視線をも固定して、対象の動きを「静態的—動的」に表現する形であることの結果であろう。

(10) では二人の人物のどちらに Empathy が置かれているかが問題だったが、(11)では Empathy は一貫して、この作品のヒロインである Fanny に置かれている。(Fanny と Edmund に対する Empathy は、この作品を一貫する作者の立場である。)

1) §4 での *MP* からの引用の巻数、ページ数は関大版による。またイタリック体は、本論での便宜のために引用者が使ったものである。

(11) The houses, though scarcely half a mile apart, were not within sight of each other; but by walking fifty yards from the hall door, she could look down the park, and command a view of the parsonage and all its demesnes, gently rising beyond the village road; and in Dr. Grant's meadow she immediately saw the group—Edmund and Miss Crawford both on horseback, riding side by side, Dr. and Mrs. Grant, and Mr. Crawford, with two or three grooms, standing about and looking on. A happy party it appeared to her—all interested in one object—cheerful beyond a doubt, for the sound of merriment ascended even to her. It was a sound which did not make her cheerful; she wondered that Edmund should forget her, and felt a pang. She could not turn her eyes from the meadow, she could not help watching all that passed. At first Miss Crawford and her companion *made* the circuit of the field, which was not small, at a foot's pace; then, at her apparent suggestion, they *rose* into a canter; and to Fanny's timid nature it was most astonishing to see how well she sat. After a few minutes, they stopt entirely, Edmund was close to her, he *was speaking* to her, he *was* evidently *directing* her management of the bridle, he had hold of her hand; she saw it, or the imagination supplied what the eye could not reach. She must not wonder at all this; what could be more natural than that Edmund should *be making* himself useful, and *proving* his good-nature by any one? She could not but think indeed that Mr. Crawford might as well have saved him the trouble; that it would have been particularly proper and becoming in a brother to have done it himself;

but Mr. Crawford, with all his boasted good-nature, and all his coachmanship, probably knew nothing of the matter, and had no active kindness in comparison of Edmund. *She began* to think it rather hard upon the mare to have such double duty; if she were forgotten the poor mare should be remembered.

Her feelings for one and the other were soon a little tranquillized, by seeing the party in the meadow disperse, ...

(MP, vol. I, pp. 83-84)

‘She’ は Fanny であり、ここは、(10) ですすでに Mary Crawford を恋してしまった Edmund が Mary (ここでは Miss Crawford と呼ばれており、これは語り手の Fanny への Empathy にもとづく一種の Represented Speech である) に乗馬を教えている情景を Fanny が遠望して、嫉妬を感じずる場面である。(11)の中ほどの、“At first Miss Crawford and her companion *made* the circuit ...” まではすべて単純形で、坦々としたテンポで話が進んでいる。(Edmund を ‘her companion’ と呼んでいるのには種々の解釈ができようが、いずれにしても Fanny の jealousy の然らしめたものであろう。) 次の ‘rise’ は一瞬のうちに終る ‘point action’ だから、ふつう進行形になれない動詞だが、‘make’ はなりうるのになっていない。なお、“watch all that *passed*” “see how well she *sat*” の単純形は時代的な相異として重要であろう。次の “After a few minutes, they *stopt* entirely,” で動きはピタリと止まり、それにつづいて進行形の文が畳みかけるように現われる。

この単純形と進行形の間 contrast は、作中人物 (ここでは Fanny) への Empathy の強弱によって説明できると思われる。(11)での、単純形で語られている間の Fanny への Empathy は、この小説全体の構成から必然的に生じた、各々の場面にとってははい

わば「惰性的」な Empathy である。進行形の現われる “he was speaking to her,” 以後で、初めて語り手は惰性を脱して、Fanny のつる嫉妬心への深い Empathy のもて、彼女の目を通して彼方に眺められる動きを描くのである。ここでは視点が固定され、あたかも望遠レンズでとった slow motion の映像を見るかのようなのである。(なお、“; she saw it, or the imagination supplied what the eye could not reach.” は (10) の例とはちがって Raybould (1957) の説をも支持するのは、注目すべきである。) 次の “She must not wonder at all this; what could . . . any one ?” も、同じく Empathy を示す進行形を含む、典型的な Represented Speech である。そして、“She began to think . . .” 以後はふたたび単純形にもどる。これは、次のパラグラフの冒頭の “Her feelings were soon a little tranquillized, . . .” で示される安らぎの状態へと彼女の心がすでに向っていることを示すが、それは語り手の Empathy が、すでにもとの「惰性的」なものにもどったことをも示している。

次に、(11) ほどに長い振幅を持ったものではないが、Fanny の一瞬の心の動きを slow motion で捉え、Empathy を誘い込む進行形の例を見てみよう。

(12) As Fanny could not doubt that her answer was conveying a real disappointment, she was rather in expectation, from her knowledge of Miss Crawford's temper, of being urged again; and though no second letter arrived for the space of a week, she had still the same feeling when it did come.

On receiving it, she could instantly decide on its containing little writing, and was persuaded of its having the air of a letter of haste and business. Its object was unquestionable; and two moments were enough to start the probability

of its being merely to give her notice that they should be in Portsmouth that very day, and to throw her into all the agitation of doubting what she ought to do in such a case. If two moments, however, can surround with difficulties, a third can disperse them; and before she had opened the letter, the possibility of Mr. and Miss Crawford's having applied to her uncle and obtained his permission, *was giving* her ease. This was the letter.

“A most scandalous, ill-natured rumour has just reached me, and I write, dear Fanny, to warn you against giving the least credit to it, should it spread into the country. . . .

(*MP*, vol. III, p. 169)

Portsmouth に居飽きて Mansfield Park への帰心を募らせている Fanny のところへ、Mary が、兄 Henry と自分が Portsmouth まで迎えに行つて Mansfield Park へ連れて帰つてやろうと手紙で言つて来る。Fanny は一応断りの返事を出したが、内心では、もう一度押し返して来てくれるだろうと期待している。そこへ、1 週間後に再度の手紙が来た。その時の Fanny の微妙な心の揺れを写し出す、Vol. III, Chapter XV の冒頭の部分である。

封筒の中身が薄いのを見て、咄嗟に思ったのは、「今日二人が London から Portsmouth に来る」という予告だろうということであり、その時には、どうしたらいいか分からないという ‘agitation’ の状態に一挙に投げ込まれるだろうという予感に襲われる。なぜなら、Crawford 兄妹の誘いに乗りたいのは山々だが、一方では、それは、Fanny がこよなく重んずる Sir Thomas の意志に反することになると彼女には思えるからである。このような予感に捉われながら手紙の封を切る寸前に、一縷の望みがフツと心に湧いた。二人は Sir Thomas の許可をすでに取りつて来てくれているのではない

か？ “the possibility of Mr. and Miss Crawford’s having applied to her uncle and obtained his permission, *was giving her ease.*” は、このような望みに托して瞬時の安らぎを覚える Fanny の心の動きを写した文である。Phillipps (pp. 111-12) は、(7)、(8)と同様に動作の継続期間が非常に短いという点で、今日の進行形と異なる Austen に特有の例として、この進行形 ‘*was giving*’ を、(6)で(8)に引き続いて挙げている。

この進行形 ‘*was giving her ease*’ も、‘before she had opened the letter’ という瞬間での心の動きを *slow motion* で捉えることによって、その微妙な心の揺れの *process* 中の一点への *Empathy* を、瞬時の間、一挙に拡大する機能を果しているのである。

さらに注目すべきなのは、この、Chapter XV の冒頭の二つの *paragraph* は、これ以後の、Henry と Maria の駆け落ちという事態の急転への *prologue* になっていることである。次のさりげない一文 “This was the letter.” によって、それまでの Fanny の可憐な思惑などすべて吹き飛ばしてしまう急激な事件が突発し、以後事態は急坂を奈落へと転がり落ちる。そして、これ以後 p. 174, l. 4 の “every moment *was quickening* …” までは、一つの進行形も見出せないのである。“... *was giving her ease. This was the letter.*” の2文の間で、束の間の心の安らぎから、次なる急転直下へと、物語は一瞬のうちに歩み入るのである。

そして、これまでに述べたように、Jane Austen の作品の英語の進行形の語用論的機能は、作中人物への *Empathy* の表現であるということができるのである。

参 考 文 献

- Gordon, Ian A. 1966. *The Movement of English Prose*.
(*English Language Series*.) London: Longman.
- [斎藤俊雄・今井光規訳 1976.『英語散文の発達』研究社]
- 長谷川存古 1973.「英語進行形の意味論」大阪大学文学会『待兼山論叢』第6号 文学篇 pp. 1-18.
- 1980.「Jane Austen の進行形——Mansfield Park を中心に——」関西大学英文学会『英文学論集』第20号 pp. 169-81.
- 細江逸記 1932, 1973².『動詞時制の研究(新訂版)』篠崎書林
- Jespersen, Otto. 1924. *The Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- . 1931. *A Modern English Grammar, Part IV*. London: George Allen & Unwin.
- Joos, Martin. 1964, 1968². *The English Verb*. Madison; The Univ. of Wisconsin Press.
- Keene, Dennis, and Tamotsu Matsunami. 1969. *Problems in English*. Tokyo: Kenkyusha.
- Korninger, Siegfried (ed.). 1957. *Studies in English Language and Literature Presented to Professor Karl Brunner (Wiener Beiträge zur englischen Philologie, LXV)*. Wien: Braumüller.
- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London; Longman.
- 毛利可信 1960.『動詞の用法(下)』(『教室英文法シリーズ』4) 研究社
- 1972.『意味論から見た英文法』大修館
- 1980.『英語の語用論』大修館

- 中島文雄 1949. 『文法の原理』 研究社
- 大江三郎 1982. 『動詞(I)』(荒木一雄監修『講座・学校英文法の基礎』第四卷) 研究社
- Page, Norman. 1972. *The Language of Jane Austen. (Language and Style Series, 13.)* Oxford: Basil Blackwell.
- Palmer, F. R. 1965, 1974². *The English Verb.* London: Longman.
- Phillipps, K. C. 1970. *Jane Austen's English. (The Language Library.)* London: Andre Deutsch.
- Raybould, Edith. 1957. "Of Jane Austen's Use of Expanded Verbal Forms," in Korninger(ed.), 1957, pp. 175-90.
- Scheffer, J. 1975. *The Progressive in English. (North-Holland Linguistic Series, 15.)* Amsterdam: North-Holland.
- Sweet, Henry. 1891. *New English Grammar, Part II.* Oxford Univ. Press.

(長谷川存古)

II. Jane Austen の体験叙法*

——特に *Mansfield Park* に関連して——

体験叙法¹⁾はすでに18世紀の小説家である Fielding や Fanny Burney が用いた叙法であることから、Austen がその創始者であるとは言えないが、彼女はこの叙法を先人以上に駆使し、この叙法の小説における役割を確立した最初の作家であった²⁾。本稿は後期の作品 *Mansfield Park* (1814) の中から資料を求め、この叙法の提示の型とその役割を考察するのが目的である。

I. 体験叙法提示の型

1. 伝達部が前出の場合

体験叙法が始まる直前に間接話法が示されている場合で、体験叙法は意味の上からはその間接話法の伝達動詞の目的語と考えられるものである。

Mrs. Norris が妹 Mrs. Price の長女を引きとってやるようにと Sir Thomas を説得する文が次例である。

1) at length she could not but own it to be her wish, that

* 本稿は「広島大学文学部紀要」第42巻(1982年12月)に於て発表したものを、一部修正して転載したものである。文例末尾の巻数・頁数は全て関大版テキストに拠っている。

1) この叙法は 'represented speech,' 'free indirect speech' などとも称されるが、本稿では「体験叙法」(die erlebte Rede)の名称を用いる。

2) Norman Page, *The Language of Jane Austen* (1972), p.124.

poor Mrs. Price should be relieved from the charge and expense of one child entirely out of her great number. "*What if they were among them to undertake the care of her eldest daughter, a girl now nine years old, of an age to require more attention than her poor mother could possibly give? The trouble and expense of it to them, would be nothing compared with benevolence of the action.*" (Vol. I, p. 4)

(イタリック体は筆者)

上例において 'could not but own' という伝達動詞を含む間接話法の文で Mrs. Norris のことばが始まり、引用符内はそのことばの続きである。'own,' 'say' のような伝達動詞によらず、それに類した動詞を用いる場合も決して少くはない。Mrs. Price が姉 Lady Bertram に家庭経済の苦境を訴え、長男を世に出す方法を尋ねる手紙文が次例である。

2) She was preparing for her ninth lying-in, and after bewailing the circumstance, and imploring their countenance as sponsors to the expected child, she could not conceal how important she felt they might be to the future maintenance of the eight already in being. *Her eldest was a boy of ten years old, a fine spirited fellow who longed to be out in the world; but what could she do? Was there any chance of his being hereafter useful to Sir Thomas in the concerns of his West Indian property? No situation would be beneath him—or what did Sir Thomas think of Woolwich? or how could a boy be sent out to the East?* (Vol. I, pp. 3-4)

ここでは 'could not conceal' が伝達動詞の役目をして、イタリック体で示した体験叙法が続く。このように伝達部が前にあって体験叙法がそれに続く型は Austen の体験叙法提示の型としては最も

普通のものである。

2. 伝達部が後出の場合

ここでいう伝達部とは上例のような伝達動詞を含む部分を意味するのではなく、物語体から体験叙法に移行していることを体験叙法が終わった後で明示する部分のことである。

Fanny の愛馬が死に、伯母 Mrs. Norris が Fanny は改めて新しい馬を所有する必要はないと考えているのに対して、Edmund が反対する場面が次例である。

3) She could not but consider it as absolutely unnecessary, and even improper, that Fanny should have a regular lady's horse of her own in the style of her cousins. *She was sure Sir Thomas had never intended it; and she must say, that to be making such a purchase in his absence, and adding to the great expenses of his stable at a time when a large part of his income was unsettled, seemed to her very unjustifiable.* "Fanny must have a horse," was Edmund's only reply.

(Vol. I, p. 43)

この例にみられるように、'Edmund's only reply' が、イタリック体の部分は明らかに Mrs. Norris の発したことばであることを示している。更に一例挙げる。Mansfield で private theatricals を催すことになって、Tom に参加を強要された Fanny が悩む場面がある。

4) To be called into notice in such a manner, to hear that it was but the prelude to something so infinitely worse, to be told that she must do what was so impossible as to act; and then to have the charge of obstinacy and ingratitude follow it, enforced with such a hint at the dependence of her situation, had been too distressing at the time, to make

the remembrance when she was alone much less so, —especially with the superadded dread of what the morrow might produce in continuation of the subject. *Miss Crawford had protected her only for the time; and if she were applied to again among themselves with all the authoritative urgency that Tom and Maria were capable of; and Edmund perhaps away—what should she do?* She fell asleep before she could answer the question, and found it quite as puzzling when she awoke the next morning. (Vol. I, p. 191)

ここでは ‘the question’ がイタリック体の部分が体験叙法であることを明らかにしている。

3. 伝達部を欠く場合

この場合は Austen は引用符を用いて示すことが多い³⁾。次例は Sotherton Court への馬車の旅の途中に、Henry と共に御者席に座っている Julia の発話である。

5) When Julia looked back, it was with a countenance of delight, and whenever she spoke to them, it was in the highest spirits; “*her view of the country was charming, she wished they could all see it, &c.*” but her only offer of exchange was addressed to Miss Crawford. (Vol. I, p. 102)

Rushworth と婚約している Maria の前に現われた好青年 Henry に関して彼女は次のように考える。

6) Maria’s notions on the subject were more confused and indistinct. She did not want to see or understand. “*There could be no harm in her liking an agreeable man—every body*

3) 引用符の使用に関しては、Austen は一貫していない。Cf. Norman Page, *op. cit.*, p. 126.

knew her situation—Mr. Crawford must take care of himself."
(Vol. I, p. 54)

しかし、次例のように引用符なしに体験叙法に移行することもしばしばである。private theatricals に代役出演を迫られた Fanny は次のように反省する。

7) But Fanny still hung back. She could not endure the idea of it. *Why was not Miss Crawford to be applied to as well? Or why had not she rather gone to her own room, as she had felt to be safest, instead of attending the rehearsal at all? She had known it would irritate and distress her—she had known it her duty to keep away. She was properly punished.* (Vol. I, p. 219)

更に次例のように一文の中で物語体から引用符なしの体験叙法へ移行していく場合もある。Fanny の馬を確保することに熱心な Edmund に向って Lady Bertram が次のように懇願する。

8) she entirely agreed with her son as to the necessity of it, and as to its being considered necessary by his father; —she only pleaded against there being any hurry, she only wanted him to wait till Sir Thomas's return, and *then Sir Thomas might settle it all himself. He would be at home in September, and where would be the harm of only waiting till September?* (Vol. I, p. 43)

4. 直接話法との並列

Mansfield に引き取られたばかりの10才の Fanny が階段で泣いているのを見つけた Edmund が、彼女を慰める場面が次例である。

9) "My dear little cousin," said he with all the gentleness of an excellent nature, "what can be the matter?" And sitting down by her, was at great pains to overcome her

shame in being so surprised, and persuade her to speak openly. "*Was she ill? or was any body angry with her? or had she quarrelled with Maria and Julia? or was she puzzled about any thing in her lesson that he could explain? Did she, in short, want any thing he could possibly get her, or do for her?*" (Vol. I, p. 16)

直接話法で導入された Edmund のことばに物語体が続き、人称・時制が代えられたために以下のことばが、体験叙法になった例である。更に Fanny のことばと Edmund のことばが体験叙法と直接話法で並列された例がある。これは上例と同じく Edmund が Fanny を慰めている文脈である。

10) It was William whom she talked of most and wanted most to see. William, the eldest, a year older than herself, her constant companion and friend; her advocate with her mother (of whom he was the darling) in every distress. "*William did not like she should come away—he had told her he should miss her very much indeed.*" "But William will write to you, I dare say." "*Yes, he had promised he would, but he had told her to write first.*" "And when shall you do it?" She hung her head and answered, hesitatingly, "*she did not know; she had not any paper.*" (Vol. I, p. 17)

この場合は、兄 William に関する物語体で Fanny が三人称化され、時制も過去時制であるために、Fanny のことばが体験叙法で表わされたと考え得る。

II. 体験叙法の役割

体験叙法が通常の直接話法や間接話法と異なって、いかなる役割または文体的効果をもっているかについて触れてみたい。

1. 物語体との関連

体験叙法は通常は物語体に続いて用いられる。(上例1)～10)参照。) 体験叙法の人称・時制が物語体のそれらと異なるらないために、直接話法と物語体の間に生じる溝ともいべきものがなく、物語体から体験叙法へ自然に移行できるという特長が考えられる。次例は Portsmouth に里帰りしている Fanny を訪ねた Henry が Mrs. Price や Fanny に散歩を勧める場面である。

11) After talking a little more about Mansfield, a subject in which her interest was most apparent, Crawford began to hint at the expediency of an early walk;—*“It was a lovely morning, and at that season of the year a fine morning so often turned off, that it was wisest for everybody not to delay their exercise ;”* and such hints producing nothing, he soon proceeded to a positive recommendation to Mrs. Price and her daughters, to take their walk without loss of time. Now they came to an understanding. Mrs. Price, it appeared, scarcely ever stirred out of doors, except of a Sunday ; she owned she could seldom, with her large family, find time for a walk. —*“Would she not then persuade her daughters to take advantage of such weather, and allow him the pleasure of attending them ?”* —Mrs. Price was greatly obliged, and very complying.—*“Her daughters were very much confined—Portsmouth was a sad place—they did not often get out—and*

she knew they had some errands in the town, which they would be very glad to do.” (Vol. III, p. 122)

この例では物語体と、体験叙法が交互に現われ、Henry と Mrs. Price の発話が引用符内に示されている。更に次例は Fanny のために舞踊会を開こうとする Sir Thomas に対する Mrs. Norris の胸のうちを表現したものである。

12) *Mrs. Norris had not another word to say. She saw decision in his looks, and her surprize and vexation required some minutes silence to be settled into composure. A ball at such a time! His daughters absent and herself not consulted! There was comfort, however, soon at hand. She must be the doer of every thing; Lady Bertram would of course be spared all thought and exertion, and it would all fall upon her. She should have to do the honours of the evening, and this reflection quickly restored so much of her good humour as enabled her to join in with the others, before their happiness and thanks were all expressed. (Vol. II, p. 101)*

この例でも物語体と体験叙法が自然に融合している。このような融合がさらに進むと、体験叙法は物語体の一要素としてその中に組み込まれ得る。次例は Portsmouth の悪質な召使いに不平不満をもつ Mrs. Price が述べることばである。

13) *A few enquiries began; but one of the earliest—“How did her sister Bertram manage about her servants? Was she as uuch plagued as herself to get tolerable servants?”—soon led her mind away from Northamptonshire. (Vol. III, p. 98)*

この体験叙法は ‘one of the earliest’ と同格語として物語体に組み込まれている。次例は Fanny が牧師館の晩餐に招かれた時の彼女の迷いを表わしたものである。

14) Mrs. Grant, with sudden recollection, turned to her and asked for the pleasure of her company too. This was so new an attention, so perfectly new a circumstance in the events of Fanny's life, that she was all surprize and embarrassment; and while stammering out her great obligation, and her—"but she did not suppose it would be in her power," was looking at Edmund for his opinion and help. (Vol. II, p. 53)

この例では、体験叙法が 'her' に続く名詞として組み込まれている。

2. 間接話法または伝達動詞との関連

通常の間接話法においては、目的語となる節・句の種類に応じて種々の伝達動詞が要求されるが、体験叙法ではその必要はないという特長がある。換言すれば、体験叙法では発話または思考が伝達動詞に煩らわされることなく伝えられるということである。次例は Portsmouth の実家に失望した Fanny の胸中を表わす体験叙法である。

15) She was at home. *But alas! it was not such a home, she had not such a welcome, as — she checked herself; she was unreasonable. What right had she to be of importance to her family? She could have none, so long lost sight of! William's concerns must be dearest—they always had been—and he had every right. Yet to have so little said or asked about herself —to have scarcely an enquiry made after Mansfield! It did pain her to have Mansfield forgotten; the friends who had done so much —the dear, dear friends! But here, one subject swallowed up all the rest. Perhaps it must be so. The destination of the Thrush must be now pre-eminently interesting.*

A day or two might shew the difference. She only was to blame. Yet she thought it would not have been so at Mansfield. No, in her uncle's house there would have been a consideration of times and seasons, a regulation of subject, a propriety, an attention towards every body which there was not here. (Vol. III, p. 95)

この体験叙法全体を通常の間接話法で表わすとすれば幾種の伝達詞が必要であろうか。

3. 直接話法との関連

上述のように、体験叙法は物語体と融合しながら、通常の間接話法にはない、直接話法の特徴を有する。それは、間接話法が登場人物の発話・思考を必ずしも忠実に表現できないのに対して、体験叙法では被伝達部のみ示されるために、直接話法的、換言すれば登場人物の発話・思考を正確に再現できるという点である。

次例は終始 *private theatricals* 上演に反対してきた Edmund が Mary のためにその強い意志を翻えたことを知った時の Fanny の心中を表わしたものである。

16) He went; but there was no reading, no China, no composure for Fanny. He had told her the most extraordinary, the most inconceivable, the most unwelcome news; and she could think of nothing else. *To be acting! After all his objections — objections so just and so public! After all that she had heard him say, and seen him look, and known him to be feeling. Could it be possible? Edmund so inconsistent. Was he not deceiving himself? Was he not wrong? Alas! it was all Miss Crawford's doing.* (Vol. I, p. 199)

to 不定詞、'objections' の反復、'After ...' の反復、'Edmund so inconsistent' における定動詞の欠如、'Alas!', 'all Miss Craw-

ford's doing' における 'all,' これら全てが Fanny の怒りや嫉妬心を表現している。体験叙法はこのように揺れ動く感嘆的思考の表現に最もその効果を発揮すると考えられる。

体験叙法は更に、語りの口調の再現にも、適している。次例は Henry が Mansfield に強い愛着をいだいていることを熱をこめて Fanny に語ることばである。

17) He had a great attachment to Mansfield himself; he said so; *he looked forward with the hope of spending much, very much of his time there—always there, or in the neighbourhood. He particularly built upon a very happy summer and autumn there this year; he felt that it would be so; he depended upon it; a summer and autumn infinitely superior to the last. As animated, as diversified, as social—but with circumstances of superiority undescribable.* (Vol. III, p. 127)

'much' から 'very much' への移行、'very much of his time' から 'always' への移行、単刀直入な 'there' を 'in the neighbourhood' と言いかえたこと、'he felt that it would be so' からより積極的に 'he depended upon it' と言いかえたこと、'a very happy summer and autumn' を 'a summer and autumn infinitely superior ... superiority undescribable' と表現を変えて気持を高揚させていること、これら全てが Henry の口調を正確に表わしているといえよう。

更に会話にみられる挿入句も体験叙法では正確に再現される。次例18) は Fanny の悪口を告げた娘に対する Lady Bertram の答えであり、19) は Portsmouth から Mansfield への帰路の馬車を申し出た Mary に対する Fanny の返答である。

18) As for Fanny's being stupid at learning, "*she could only say it was very unlucky, but some people were stupid, and*

Fanny must take more pains; she did not know what else was to be done; and except her being so dull, she must add, she saw no harm in the poor little thing — and always found her very handy and quick in carrying messages, and fetching what she wanted.” (Vol. I, p. 22)

19) She thanked Miss Crawford, but gave a decided negative.—“*Her uncle, she understood, meant to fetch her ...*” (Vol. III, p. 167)

それぞれ ‘she must add,’ ‘she understood’ が挿入されて会話の口調を留めている。次例は新来の牧師夫人 Mrs. Grant を厳しく非難する Mrs. Norris のことばである。

20) Mrs. Grant, instead of contriving to gratify him at little expense, gave her cook as high wages as they did at Mansfield Park, and was scarcely ever seen in her offices. Mrs. Norris could not speak with any temper of such grievances, nor of the quantity of butter and eggs that were regularly consumed in the house. “*Nobody loved plenty and hospitality more than herself — nobody more hated pitiful doings — the parsonage she believed had never been wanting in comforts of any sort, had never borne a bad character in her time, but this was a way of going on that she could not understand. A fine lady in a country parsonage was quite out of place. Her store-room she thought might have been good enough for Mrs. Grant to go into. Enquire where she would, she could not find out that Mrs. Grant had ever had more than five thousand pounds.*” (Vol. I, pp. 36-37)

ここでは ‘she believed’ と ‘she thought’ が挿入されている。

以上体験叙法についての私見を述べた。Norman Page⁴⁾は Austen の体験叙法使用は *Mansfield Park* や *Persuasion* のような後期の作品になるほど頻繁であると指摘している。それは *Emma* などでは比較的外面的世界が描かれているのに対して、*Mansfield Park* が登場人物の心理的内面の動きを主題としている点と深くかかわっているからだと思われる。

(田中逸郎)

4) Norman Page, *op. cit.*, p. 125.